

日本火山学会 60 周年特集「火山学の最新動向と今後の展望」 について

日本火山学会会長 井口正人
60 周年記念事業委員会 WG1 奥村 聡

本特集は、日本火山学会 60 周年記念事業の一環として企画された総説集である。戦後に再興された日本火山学会の機関誌として、「火山」第 2 集の第 1 巻 1 号が発刊されたのが 1957 年であった。その巻頭言には、『われわれの志す所は、火山現象の本質的な解明である』、『再発足する日本火山学会は、地球物理学、地質学、地球化学等の異なる分野に属する研究者が、それぞれの立場から火山現象の解明のために協力することを主目的としている』と述べられている。現在に至るまで、この精神は「火山」誌に脈々と受け継がれてきた。この間、火山学は著しい進歩を遂げ、学界をとりまく環境もまた大きく変化してきた。今、将来の方向を展望するには、まず我々がどこにいるのかを知らねばならない。そのため本特集に設定された目的は、最近 10 年間における火山学および関連分野の発展について整理し、火山現象の理解がどのように進展したかを振り返ることである。非会員も含め、気鋭の執筆者から全 22 編のご寄稿をいただいた。

本特集では、3 編の「概論」（岩森、中島、小屋口）において、マントル最下部から地表までを見渡し、火山とは何かを理解するために大きな視点からの火山観が提示される。それに続く 19 編の「対象と手法」では、近年の進展が著しい分野について、最新の成果と今後の課題が紹介される。現象の時空間スケールと研究手法が多岐に亘っていることは、これまでの 10 年ごとの特集と同様であるが、火山の深部構造・深部過程や、火山学と社会との連携といった、噴火現象そのものに留まらないテーマも多く取り上げられているのが本特集の特徴である。

それに加えて、学会を取り巻く社会的状況の変化に言及するテーマも取り上げた。東北地方太平洋沖地震に起因する福島第一原発事故の発生は、原子力発電所と巨大カルデラ噴火の問題を我々に突き付けており、戦後最悪といわれる犠牲者を出した 2014 年御嶽山噴火では、火山研究者の人材不足や地域との関わり方の問題が露呈した。一方で、ジオパーク等のエコツーリズムへの注目は、火山学の新たな振興の好機とも捉えられる。こうした状況の中で、学術としての火山学が着実に進歩を続け、関連する研究分野や社会に対しても貢献していくために、本特集がいわば灯台としての役割を果たすことを信じるものである。

末筆ながら、本特集の発行にあたり、執筆ならびに査読の労をお執りいただいたすべての皆様に深く感謝申し上げます。また、60 周年記念事業委員会および WG1 のメンバーは、本特集の企画を行うとともに、その多くは臨時編集委員会で編集作業にあたった。ここに記して御礼申し上げます。